

〈 書評論文 〉

## 資源化する文化とその実践

山下晋司『観光人類学の挑戦——「新しい地球」の生き方』  
(講談社、2009年)

木原 弘恵

### 1. 本書の視点

本書は現代のグローバル化社会における移動に着眼し、その移動の様子を人類学という領域から描くことで、現代社会の人びとの生き方を探る試みである。著者はこれまで人びとの「生き方」を研究してきた人類学が、社会や文化といった境界を持つことを前提に展開されてきたことに疑問をもつ。そうした従来の人類学に対して、本書はグローバル化の時代における「越境の民族誌」という立場から、今日の文化や社会のあり方を論考しようとするものである。

そのため、本書では「観光」と「移住」といったしばしば別々に考えられる現象が、じつは相互に関連しつつ、移動する人びとの世界を形成しているという観点が準備される。そして、グローバル、ナショナル、ローカルなパースペクティブを交錯させながら、地球上を移動する人びとがともに織りなす文化景観を描き、グローバル化のなかでの新たな人類学のあり方を提示しようとしている。

以上を目的として、本書は「リゾーム」と「トランスナショナルリティ」というキーワードに重点を置き、現代社会に現れた6つの場の越境の民族誌の文化景観を提示していく。ドゥルーズとガタリによって提示されたリゾームという概念は「根幹」とも訳されることもあるが、ツリー（樹木）の対概念として設定される。つまり、ツリーの体系は根幹から出発して枝葉末節まで進んで全体像をとらえる従来の西欧哲学の思考伝統に照応するのに対し、リゾームは相互に絡み合いながら他の場とつながっていくという日常的実践やオルタナティブな思考のイメージである。一方、トランスナショナルリティについては国家を前提にしないということが特徴である。著者も述べるように、このどちらの概念もが既存の文化概念や人類学の考え方に要求するのは、社会的・文化的単位解体であるという。本書がグローバル化の時代における「越境の民族誌」を標榜する所以であろう。ここで対象となる人びとは、国境を利用して生きる人びとであり、国家と国家の「はざま」を生きる人びとなのである。

## 2. 本書の内容

内容に移ろう。本書の構成は以下のとおりである。

1章では、人類学者である著者の問題関心が提示されている。その内容は、グローバル化が進む社会のもとで人類学のあり方に転換期が訪れていることを提示するものであり、今後のあり方を模索するものだ。著者は従来の人類学が、社会や文化の境界を暗黙の前提に論じてきたことに対して疑問を呈し、新たな実践的でもある枠組みが導入されることを望んでいた。すなわち、現在の人類学においては、ある場所がどのようなものなのか明らかにしていくことが求められているのではなく、リゾーム状のグローバル化の現状を明らかにしていくプロセスにおいて、ある場所の考察が必要とされるというスタンスなのであった。

2章から7章までは具体的なグローバル化の文化景観が描かれていく。2章では、日本からアジアあるいはアメリカへ国際移動する日本人女性を事例として取りあげる。かつて国際移住は男性の領分であると言われており、植民地経営、戦争、出稼ぎなどは男性が行なうこととされてきた経緯がある。しかし、現在、海外旅行者や海外の在留日本人の数が上昇傾向にあり、その男女比において女性の割合が高まっていることが統計上明らかになっている。そこで著者は、インドネシアのバリ島における日本人妻とアメリカのカリフォルニア州における語学留学に来ている女性たちを対象とした調査で得られた日本人女性の声を提示して、越境のジェンダー的な意味を探ろうとする。そこで著者は、男の旅が会社や国家というものに縛られる傾向があるのに対し、「女の旅は自己都合」に発しているという側面があるという報告に関心を寄せる。そうして、かつて男性の領分であった国際移動の中に変化が生じ始めていることを確認し、女性の越境のなかに均質な国民国家空間の創出の物語を脱構築していく可能性を見出している。

3章は、日本国内に流入してくる女性の越境の意味を問うものである。かつては移民送出国であった日本であるが、高度経済成長期を境にそれが減少し、1980年以降は移民受け入れ国となった。本章では、日本に来る外国人のなかでもとくにフィリピン女性に注目する。家事労働という単純労働を認めない日本へ、フィリピン女性はエンターテイナー、あるいは性産業の従事者として入国してきた。その結果、日本における日本男性とフィリピン人女性の婚姻数が、国際結婚の国籍の組み合わせのトップとなる状況が生じているという。そこで著者は、そうした現状が現代の日本社会の根底にあることに着目し、彼女たちへのインタビューの中で彼女たちが「普通であること」を望む様子を提示し、それが「内側からのグローバル化」の契機となっていることを指摘する。

4章では、グローバル化の過程の中において地域の伝統文化が新しい意味を帯びていく様子を提示する。この章では文化資源という言葉を用い、石油や森林などの天然資源と同様に、文化を資源として捉える視点をいながら議論を展開させる。というのも、人類学における文化はそもそも「生活様式」という意味で使用される傾向にあったが、文化財保護法という文化や世界文化遺産という文化はそれとは異なることにある。文化財保護法という文化や世界文化遺産という文化は文化相対主義的に捉えられるものでは決してなく、普遍的価値を付与された芸術的価値をもつものなのである。そのため、普遍的価値を与えられて客体化した文化を無視できない状況が生じているのだ。つまりグローバル化が進展する今日の社会では、文化が「資源である」ことに加えて「資源になる」状況が生じており、本書はその文化の資源化について論じるものなのである。ここでは、対象文化に対してある主体

が「位置取り」を戦略的にどのように決定するかが問題となる。本章ではインドネシアのバリ、日本の白川郷、中国の雲南省麗江の事例をとりあげ、文化資源にかかわる人々の「位置の取り方」の様子を提示し、考察している。そして、この「位置取り」の在り方を考察する視点によって今日社会のアイデンティティ形成のあり方が明らかになることを指摘し、そこにより大きな時間と空間に向かう広がり可能性が存在していることを著者は説くのである。

5章は、4章で述べた資源化する文化の「自然版」である。自然もまた、文化と同様に観光の文脈で対象化され、「発見」される。そのような状況を提示するために、著者はマレーシアのサバ州におけるエコツーリズムを取り上げる。本書はマレーシアでのエコツーリズムは、①責任あるツーリズム、②自然環境の保全、③地域社会への利益還元、であることにポイントを置いたものであり、その市場は先進国の「フーピー」と呼ばれるミドルクラスが担い手となる現状があるという。「フーピー」(whoopie: wealthy, healthy, older people)とは「寿命が伸び、退職後の人生の時間が長くなった結果生み出された、富裕で元気な熟年層」のことであり、エコツーリズムにはかれらのイデオロギーが色濃く表れていると述べる。「破壊されていく自然環境」は意識的に調整していかねばならない状況が生じており、それには現在のエコツーリズムの担い手の「フーピー」たちの関わりが欠かせない。また、自然環境を意識的に保護していくこのような状況は環境主義的なイデオロギーの生産を意味しており、そこには消費が生み出される。フーピーたちの存在が示唆しているように、グローバル化のもとでのエコツーリズムが展開されている場には地元の人々だけではなく、政府行政、旅行者などさまざまな主体が交錯している様子が見てとれるのであり、それが現実なのである。

6章では、パラオというかつて日本の委任統治領であった地域を、歴史的視点を組み込みながら考察している。近年、日本からパラオへ訪れる人の多くは「南海の楽園」というイメージを持ち、ダイビングなどを目的として観光で訪れている。かつては、日本からパラオへの観光は、ダイビングツアーではなく慰問ツアーがメジャーであった。筆者はダイビングツアーを中心に展開される現在の越境をも観光というかたちで現れた日本型オリエンタリズムの表れであるという。つまり、この章では日本人とパラオという「南」との出会いを植民地期から現在までの歴史的コンテクストから概観し、現在行なわれているダイビングツアーがポスト・コロニアルの時代における日本型オリエンタリズムの表出のあり方であるというのだ。ここで重要なことは、それらの再生産が観光という現象を介しながら展開されていることであろう。

7章では、観光と移住の境界が曖昧になってきている状況を提示している。近年、不安が増大していく社会的経済的状况の中で、退職者がコストの安い海外で、より質の高い退職生活を送るという人が増えている。これまで様々な研究者によって、近代社会における観光という現象と労働の関係については論じられてきたが、おおよそ観光は労働に対置されてきた経緯がある。そこで著者は、マレーシアやバリに移住する人びとのインタビューにより、近年のこのロングステイを「生存戦略」としてとらえていこうとする。そこで、グローバル化のなかでますます越境的になる私たちの生活を、観光＝移住という枠組みから論じることの可能性を提示している。

8章では、2章から7章までの越境の事例からグローバル化時代の新たな公共性について考える必要性を述べる。ここで本書を総括するテーゼと思しき「世界は混じり合い、かつ混じり合わない」という認識が登場する。グローバル化の時代にあって人びとは、「ここ」とは違った場所をもとめて越境を行うため、越境という行為には「はざま」を利用しようとする生き方が様々な場において見られる。この中で、移民を受け入れる側の日本社会も多民族社会とどう向き合うかが問われている現状が

生じていることを指摘し、そこに「人間の安全保障」(human security)を考慮していく必要性を著者は論じる。人類学は個々の社会や文化をある種閉じられた世界として個別に描くような従来型から脱して、今まさに実践的な課題に迫られている。混じり合い、混じり合わない一つの世界において、移動する人びとの実践の中にある公共空間を分析することこそ急務なのである。2章から7章の事例をあげながら著者が主張してきたことは、今日世界中のどの場所をとっても、その生活、文化はもとより自然さえもがグローバル化のプロセスに置かれ、明確に固定された境界なくリゾーム状に繋がっているということであった。

かつては文化相対主義と普遍主義は相反するものとして捉えられていた。しかし、多様であるからこそ普遍が求められるのであり、両者は対立する関係なのではなく、補完の関係にあるのだという主張が現れている。著者は、人権や民主主義といった普遍的概念についてすら、それらの概念自体が意味する内容が変化していくような性質を持っており、それらの概念を静的ではなく動的なものとして捉えることが重要であるという見解を支持している。評者も概ね同感である。だが、著者の述べる混じり合う一つの世界で生じている混じり合わない状況のもとで、公共性がどのようなかたちで担保されていくか、ということが、本書が描いてくれた問題の見取り図のあとに残された課題であろう。次節で考えておこう。

### 3. 資源化する文化とそれを「運営する」人々の実践への着目の意義

本書は、地球をリゾーム上に結ばれた境界のない一つの空間ととらえ、「生存のための資源」を求めて移動するヒトに着目して論理を展開する。それは社会や文化は境界をもった不連続性と定義されてきたかつての人類学のあり方を改めて問い返すとともに、境界のない一つの空間であるにもかかわらず依然強い影響力を持つ国境に注目し、人々がどのように国境を越えているのか様々な事例を提示することによって、さまざまな文化が境界を越えて「混じり合い、混じり合わない」グローバル化時代の「文化景観」を描写する作業でもあった。

本書の中で評者がとくに興味を抱いた部分は4章である。それは本書の観光あるいは越境の事例の中でも、ゲスト側だけでなくホスト側にも重点を置き、「文化遺産指定」などによる文化の動態論が展開されているため、より具体的なかたちの考察へと繋がれる可能性が開かれているように感じたからである。

筆者はこの章で文化の資源化に着目し、世界遺産に付与される「普遍的な価値」は、ローカル、ナショナル、インターナショナルな複雑な連続体のなかでのネゴシエーションが決定していくものであると論じている。この点において、ネゴシエーションのプロセスを経て世界遺産という「普遍的な価値」を持つことになった中国の雲南省の麗江の事例は興味深い。なぜなら、本書に登場するゲストハウスを供するCさん家族の事例が示すように、世界遺産の対象である雲南省麗江のナシ族が築いた景観は、今日までのさまざまな民族の交流があつてこそ成りたっているものであるからだ。この事例によって示されているのは次のようなことだ。「普遍的な価値」を付与されようとする対象文化は、結局さまざまな交流によって形成されたものであり、さらにその「普遍的な価値」を付与する世界遺産なる制度自体もローカル、ナショナル、インターナショナルな複雑な連続体のネゴシエーションの産物である。それゆえ、筆者はローカル、ナショナル、グローバルな社会的布置における主体の「位置の取り方」に重点を置くのである。

4章ではインドネシアのバリ、日本の岐阜県白川郷、中国の雲南省麗江などの事例が提示される。人々と資源化する文化とのこのようなかわり方の事例は一体何を示唆し、グローバル時代の文化のあり方に対してどのような理解を与えてくれるのだろうか。

本書では、世界遺産という普遍的価値と生活様式としての文化との関係が、以下のように述べられている。

世界遺産という文化のあり方を考えるとき、重要なことは、文化をめぐるこうした人類学的生活文化的な用語法と文化財・文化遺産的な用語法を対立させることではない。むしろいかに関係づけるかである。(中略)生活様式としての文化と芸術としての文化、相対主義的な文化と普遍主義的な文化は、互いに排他的な関係ではなく、動的な生成関係にあるのである (p. 77)。

著者は、この普遍主義的な世界遺産という価値は、絶対的なものではなく、ローカル、ナショナル、そしてインターナショナルな連続体のネゴシエーションの産物であるととらえた上で、本来とは別のコンテキストにおける文化の使用の仕方、あるいは生活文化の資源化にかかわる問題を明らかにすべきだという。なぜならすでに述べたとおり、今日の人びとの越境や移動を考察する中で、文化がネゴシエーションを経て資源化していく過程における、資源と様々なアクターの「位置取り」を本書では重視しているからである。評者も、日常に根ざした文化と普遍的価値を付与された文化とが「動的な生成関係」にあるという部分には共感をおぼえるし、「位置取り」の分析は、人びとの共同性の媒体となりうる複数の「文化」なるものの共存・並存や融合について考えていくさいに必要である。ただ、本書で筆者も強く論じているとおり、世界は一つの空間であるにもかかわらず「世界は混じり合い、混じり合わない」という状況が実際に生じているならば、この現状をより深く理解するために、さまざまなアクター間の文化との関わりの詳細な分析を同時に提示することも、上記の理解への手がかりとして重要であるように感じるのである。たとえばローカル世界のアクターといっても様々な立場がある。ネゴシエーションを経て資源化していく文化と人々の「位置取り」に加え、ローカルな場で、誰が、どのようなシステムを築きながら、資源化された文化を運営しているのかを詳細に考察することは、現代の公共性を考察する議論に新たな地平をもたらすだろう。そこで、最後に簡単にではあるが、評者の調査地である岡山県笠岡市白石島における国指定の文化財を用いながら、資源化する文化の事例を提示し、本書から受けた示唆をすこしだけ敷衍しておきたい。

評者の調査対象地の白石島では、古くから伝わる舞踊が継承されている。その舞踊は国によって1976年に重要無形民俗文化財の指定を受け「普遍的な価値」を付与されている。当地の人びとは「普遍的な価値」を付与されたその舞踊を島内外において観光目的に実演しつつ、一方で、島の年中行事のなかにも昔からその舞踊を組み込みながら、観光客を相手としたものではない踊りの場も設けている。現在のそれらの踊りは双方とも「白石踊」と呼ばれるが、面白いことに展開される形式が随分と異なっている。たとえばその違いとして衣装や踊りの時間などがあげられよう。その「二つ」の舞踊は、積極的に外部からのまなざしを取り入れる踊りとそうでない踊りとして分けることもできる。「二つ」の舞踊を担保するという白石島での実践は、舞踊が島外に出向きはじめ、次第に外からのまなざしの対象となっていくプロセスの中で明確なものとなってきたが、この二者の関係は相互的反射的に並存しつつお互いに影響を与え合うような、上述の「動的な生成関係」を示唆する事例であると考えられる。こうした事態を理解するためには、対象としての文化をとらえその上で展開される

「位置取り」を考察するだけでなく、いったん文化（文化財／生活文化）を要素としての文化として捉えかえすために、視点を当地の人々の実践に向けることが必要になる。

世界遺産と国家のかかわりが大きいことは本書でも示されていたが、「二つ」の舞踊を担保するというこの実践は、まさに筆者が指摘する「混じり合い、混じり合わない」文化景観の「混じり合わない」さを、ローカルの現場で人びとはどのように咀嚼し、位置づけ、そして生活を組み立て直しているのかを示唆する事例でもある。文化に普遍的価値を賦与する力の作用が、ローカルな場における普遍的価値と固有の価値とのネゴシエーションという内と外との関係だけではなく、ローカルな場において人びと自身が文化を多元化し、文化の資源化に対応するという複層的な相互関係からなる「実践とそれをとりまく構造」の形成をみちびく。こうした機序に目を向ける必要がある。文化にコミットし運営する人々（ローカル）の微細な実践の分析を進めることで、本書の論じている文化の資源化というローカル、ナショナル、そしてインターナショナルな現象の分析が、さらに、「人びとは混じり合い、混じり合わないというアンビヴァレンス」な状況のもとでの公共（性）とは何かという議論へも展開する可能性が開かれているように思う。

（きはら・ひろえ 博士課程後期課程）